

ISAPH

アイサップ
ニュースレター

第29号

News Letter

2018年3月30日発行



写真: マラウイ 保健ワーカーの活動拠点建設を手伝う母親

ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health



希望の大陸アフリカとISAPH

ISAPH 理事 渡部 和男

1960 年はアフリカの年と言われ、カメルーン、ナイジェリアをはじめ 17 の国が独立し、世界の関心はアフリカに集まりました。しかし、希望の大陸と呼ばれながら、その後アフリカは必ずしも順調に発展しませんでした。コンゴ動乱、ルワンダ内戦、ダルフル紛争などの紛争が続いたことに加え、マラリア、結核、HIV エイズなどの感染症が蔓延し、乳幼児死亡率も高く、母子保健上の問題が山積しました。2014 年に西アフリカを中心にエボラ出血熱が発生し、この地域の住民を恐怖のどん底に落とし入れたことは記憶に新しいです。干ばつなどの天候不順、イナゴの発生によりもたらされた飢饉は地域によっては人口を半減させる要因となっています。

アフリカは開発援助の観点から最も重要な地域であり、OECD の DAC 統計によれば、世界の援助の約 37% がアフリカに向けられています。これまでも UNDP、世界銀行、ユニセフを始めとした国際機関、また、先進国政府がその支援の手を差し伸べてきました。そして少しずつですが、結果が出始めています。

ここ数年、アフリカの別の一面に焦点を当てて、再びアフリカを希望の大陸とする見方が出てきました。第一は人口です。2016 年時点でのアフリカの人口は 12 億 1600 万人ですが、2100 年には 44 億人となり、世界人口の約 40% を占めるまでに拡大すると予測されています。中でもナイジェリアの人口は急速に増加しており、2050 年までに、アメリカを抜いて、インド、中国に次ぐ世界第三位の国になると見られています(国連「世界人口展望 2017 年版」より)。また、地下の鉱物資源は豊富であり、特に南アフリカ共和国が金、ダイヤモンド、マンガン、クロムなどに恵まれていることは大きな強みです。



マラウイ・ムジンバ県での乳幼児発育状況の把握



アフリカ大陸とマラウイ

中国の 3 倍以上の面積を有するアフリカ大陸の特徴は、自然、民族、歴史などの面における多様性です。今後、移動手段が改善されれば、観光の観点からアフリカの魅力は倍増します。タンザニアにあるアフリカ最高峰キリマンジャロ、ジンバブエとザンビアとの国境にあるビクトリアの滝などの世界自然遺産に加えて各地に世界文化遺産も存在します。

日本のアフリカ支援の大きな柱は、1993 年に始まった TICAD (Tokyo International Conference on African Development: アフリカ開発会議) です。この TICAD での支援の大きな柱の一つは、保健医療分野での協力です。2016 年 8 月のナイロビでの TICAD VI において、日本は、アフリカでの人材育成を通じて公衆衛生危機への対応能力の強化、UHC (ユニバーサルヘルス・カバレッジ) の実現に貢献していくという決意を表明しました。UHC とは、全ての人が基礎的な保健サービスを必要なときに負担可能な費用で受けられることを指します。アフリカの開発にとり、UHC は極めて重要なのです。

ISAPH は 2005 年より、アフリカのマラウイで母子保健関連プロジェクトを進めています。最近 10 年間の活動を要約すれば、北部ムジンバ県で、栄養改善を含めた乳幼児の健康問題に取り組んだことです。この活動は地道でしたが関係者から高く評価され、本年より JICA 草の根技術協力事業の資金をいただき、同じくムジンバ県で母子の栄養改善プロジェクトに取り組むこととなりました。具体的には、栄養に関する正しい知識の普及と実践、農作物・家畜家禽の導入、国による保健栄養サービスの強化です。

2000 年の国連ミレニアム開発目標の採択から 18 年近くが経過しました。この MDGs の中身は持続可能な開発目標 (SDGs) に引き継がれましたが、その意義と内容は変わっていません。乳幼児死亡率の削減、妊産婦の健康の改善等が未だに課題となっています。世界の開発途上地域において貧困からの脱却は容易ではありませんが、確実な方法は基礎教育の充実と母子保健の改善です。ISAPH がマラウイでの地道な活動を通じて、近い将来の「希望の大陸アフリカ」の実現に向けてしっかりと協力していることを明言します。



農村部に保健ワーカーをスタンバイさせるための施策

ISAPH事務局 村井 俊康

2017年、マラウイ国においてISAPHは現地保健ワーカーの活動拠点（兼住居）の建設支援事業を開始しました。同年に予定していたチャンジョブ・ヘルスポストとカウンディ・ヘルスポストを担当する保健ワーカーの活動拠点2軒が完成し、私はその引き渡し式典に招待され出席しました。

医師・看護師等の医療従事者が不足する中、マラウイにおいて国による保健サービスを住民まで届ける役割を担うのは政府雇用の保健ワーカーです。ISAPHは同国農村部において母子の栄養問題に取り組んでいますが、その際、同ワーカーと協働しています。

しかし、問題があります。日照りの中、土埃の中、また雨の中、保健ワーカーは5km程度、時には10km超の未舗装路を自転車もしくは徒歩で自らの担当村まで通いますが、負担の大きいこの移動が保健ワーカーの村内での活動を大きく制限しています。なぜ、5km、10kmを通わなくてはいけなくなるのか。その理由は自らの担当村内に安定的な住居が存在しないためです。

保健ワーカーが自らの担当村内に安定的に居住（スタンバイ）できるようにすることで現地保健サービスの向上並びに健康増進活動の強化を図ることが、この事業の狙いです。

同建物の建設により、保健ワーカーの業務である各種感染症対策・公衆衛生教育等の疾病対策に加えて、疾病の初期診断治療・病院への紹介機能が強化されます。保健ワーカーが各々の担当村内にスタンバイする事の意義に関しては、例えば、脱水症状を起こして搬送されてきた1歳未満児に対してその場で経口補水液及び亜鉛を与えた上で保健センターへ適切に紹介し当該児を救った事例等が報告されており、今後も同様の事例を増やすことが可能です。また、ISAPHは母子

の栄養改善活動においてこれまでも現地保健ワーカーと協働しており、この事業との相乗効果により母子の栄養状態改善を狙うことが可能です。

同建物は現地コミュニティとの協働の下に建設しています。コミュニティがレンガを焼いて積み上げるところまでを終了させるのが先であり、それを確認した後、屋根・床・壁といった建材の調達をISAPHが支援することで建物を完成させます。完成した建物は現地コミュニティの所有物となります。このような条件付きの支援は、現地住民のオーナーシップを高めるとともに建物の建築費用を抑えることにも役立っています。日本からマラウイへの職員派遣費用を除けば概ね15万円程度あれば1軒を建てることのできるよう、ISAPHでも努力をしています。

2017年に完成しました2棟につきまして、チャンジョブはNGO団体のiサイクル様、そしてカウンディは同じくNGO団体のONE by ONE様より資金の提供をいただきました。この場をお借りし、お礼を申し上げます。

また、テルモ生命科学芸術財団様から助成金を頂戴し、2018年4月からの1年間で新たに5棟を建築します。今回、同建物5棟を建築すると直接的な裨益人口はおおよそ6500名程度、うち5歳未満児が1200名程度になります。

2017年12月に行われた引き渡し式典では、地域の村長を束ねる立場にある村長も出席し、本事業に対する期待の大きさを伺うことができました。



建物が完成し笑顔を見せる保健ワーカー

現地の人が喜ぶ様子や現地の人々による気持ちのこもった歌や踊りはこちらとしても大変励みになります。少しずつでも確実に進めていくことができればと考えています。



建設中の建物を視察



引き渡し式典の様子



AINプログラム： 村を支えるボランティアを育てていく ～私たちの健康は私たちの手で～

ISAPH ラオス 佐藤 優

ISAPHが活動している村では子どもたちを取り巻く低栄養の問題があります。生まれて数日の赤ちゃんにもち米を与えたり、一種類のおかずと米だけで食事を済ませたり、食事の代わりに駄菓子を買って与えるなどの習慣が見られます。これらの問題は、怪我・病気の治療とは違い、第三者の努力だけで解決することができません。住民自身が子どもたちの栄養状態に関心を持ち、現状に気づき、改善のために行動していくことが必要です。そのためには、必要な食材を確保できる環境があることに加えて、母親（養育者）が適切な知識を身につけ、行動に移すことが求められます。そして、近所に同じ課題を抱えた母親や、一緒に行動する仲間がいることが大切であるとISAPHは考えています。

2017年度から公益財団法人味の素ファンデーションによるAINプログラムのご支援を受け、新しくスタートした「村落栄養ボランティア（VNV：Village Nutrition Volunteer）育成事業」は、簡単に言うと村の中に食事・栄養のリーダーを作り、支援する取り組みです。ラオスの農村部の住民は定期的な現金収入の手段がなく、自身の生活を切り盛りするのに精一杯ですが、一部には「自分の村の子どもたちの栄養の問題を何とかできないか」と思っている住民もいます。



佐伯先生の講義



これまで食べたことがない昆虫の調理方法に驚く研修生たち

ISAPHはそのような人々を集めて研修を行い、VNVとして育成する事業を始めました。育成したボランティアは、正しい知識・技術を身につけ、日常生活のいろいろな場面で、住民に食事・栄養の情報を伝えていけるようになることが期待されています。昨年末に第1回のVNV育成研修を実施したところ、12名のボランティア研修生の枠はあっとい



調理実習の様子

う間に埋まり、このような機会が訪れることを心待ちにしていたように感じました。

今回の研修で参加者は、お揃いのエプロンに身を包み、子どもが健やかに成長するために必要な食事・栄養について学びました。また、正しく知識・技術を学ぶために、保健行政の垣根を越えて専門的な知識を持つ講師を招待しました。例えば、カムアン県職業訓練校からは、調理科の先生を招いて食事を美味しく味付けする方法を教えていただき、調理実習も行いました。さらにISAPHが以前から一緒に活動している食用昆虫科学研究会の佐伯真二郎先生にも、昆虫の栄養学的な長所や昆虫を使ったレシピについて説明していただきました。ラオスの人々は日頃から昆虫を食べていますが、その栄養素についてはあまり考えたことがなかったようで、参加者は新鮮な興味をもって講師の話聞いていました。参加者が理解できるように、ゆっくり進めていったことで4日間という長い研修となりましたが、皆、非常に積極的で、大盛況のなか本研修を終えることができました。今後も定期的に研修を受けながら、村のボランティアと住民が協力して食事・栄養の問題を解決できるように、ISAPHとサイブートン郡保健局で支援していく予定です。

日本でも戦後は食糧難があり、今のラオスと同じように子どもたちの栄養状態に深刻な問題が生じた時期があります。副題にある「私たちの健康は私たちの手で」は、そのような中で生まれた、食を通じて健康づくりを行うボランティア「食生活改善推進員」たちのスローガンです。自分たちの食事・栄養の問題は自分たちで解決しようと、地域の主婦が中心となって活動を始めたとされています。ラオスでは食事・栄養に関するボランティア活動はあまり活発ではありませんが、両親が子どもの成長を気に掛けるという想いは、みんな同じです。今回の参加者が見せてくれたように、ISAPHが何かきっかけを作ることによって、ラオスの人々の「自分たちでできること」の発見に繋がるかもしれません。私たちは、そのような住民や行政の力を引き出し育てていけるよう、パートナーシップを大切にして活動を進めています。

村のリボルビングファンド支援

ISAPH ラオス 木村 江里子

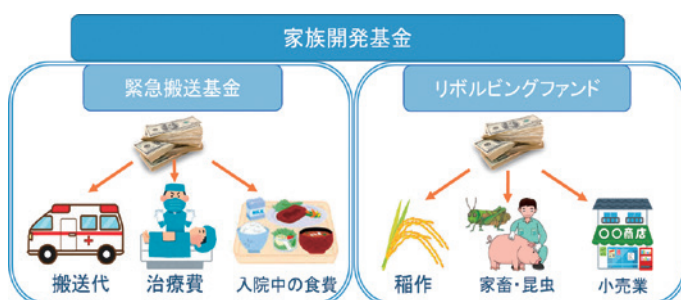
ISAPH ラオス事務所では、サイブートン郡の村民へのアウトリーチ活動（出張保健サービス）を通して、乳幼児の発育状況のモニタリングや健康教育の実施、施設分娩の推進などの支援をしてきました。しかし、村での簡易聞き取り調査の結果、それ以外にも母子保健の向上を阻害する大きな要因があることが分かってきました。

特に問題となっているのが、現金収入の不足によって緊急時に治療費・交通費が払えないため病院に行けないことと、健康教育により実際の行動を変えたいと思っても、元手がないということ（例えば、子どもに良質なたんぱく質を食べさせたくても、肉を買うお金がないなど）です。

このような問題を改善させるために外部の組織が一方向的に支援を行っても、それは一過性のものとなります。そのため、村が独自に緊急搬送や生計向上のためのシステムを持ち、それを運営・管理できるよう、ISAPH ラオス事務所は支援を開始しました。

ISAPH が活動している3村は、過去に生計向上支援の資金援助を受けたことがあり、村には原資が存在していましたが、委員会の能力不足などからその原資がうまく活用されていない状況でした。ISAPH の対象村の一つであるパーコーン村は、村内に平行して動いている5つのシステムが存在し、それらがうまく機能していませんでしたが、村の委員会メンバーの生計向上支援に対する意欲や村長のリーダーシップが認められたため、生計向上支援の対象村として選定しました。こちらが新たなシステムを押し付けるのではなく、村人が新しいシステムの有効性・効率性を十分に理解し、彼ら自身が決断し、システムを構築していく方法で進めているため大変時間がかかりますが、このプロセスが村民にとって重要であると考えています。

幾度にもわたるワークショップの結果、新システムは緊急搬送基金と小規模融資（リボルビングファンド）の2つに分けて管理することにし、その2つの基金をまとめて家族開発基金という名称にすることが決定し



「融資を受けたい人？」との問いかけに、元気よく手を上げる女性たち



熱心にワークショップに参加する基金の委員会メンバー

ました。今回の支援におけるリボルビングファンドとは、限られた原資を各世帯に貸し付け、一定期間で利子をつけて返済してもらう仕組みのことを言い、これがうまく機能すれば原資は継続的に増加し、各世帯と村における生計の向上が見込まれます。

ただ、これまでの方法ではうまくいかないことが明らかであったため、新システムでは女性がグループを作り、負債が出た場合にはグループ内で相殺するシステムにしました。一般的に女性は家族の健康・教育への支出を重視する傾向にあり、ラオスでは家計を管理しているのは女性ですので、今後女性の活躍に大いに期待しています。

しかし支援を進めるにあたって、課題は山積みです。これまでかなりの時間をかけてワークショップやトレーニングを実施してきましたが、村の委員会メンバーや村民の財務管理の能力が驚くほど低いため、手取り足取りの手厚い支援が必要になります。さらにパーコーン村には、過去の支援による負の遺産である負債が多く残っており、その回収を進めながら新システムを稼働していくのは、かなり時間と労力のいる作業です。

しかし、この基金に大きな期待を寄せている村民のためにも、ISAPHとして負債回収の側方支援を行いながら、まず新基金の中でも特に保健医療分野に直結する緊急搬送基金を早急に稼働させたいと考えています。そして、夏の田植えの時期までには負債回収の目的を付け、新リボルビングファンドを実施できるよう、今後も精力的に活動を進めていく予定です。



ラオスからの報告

AINプログラム： 保健医療職の努力や工夫は海を越えて

ISAPH ラオス 佐藤 優

ISAPH ラオス事務所では、ラオスの農村部で母子保健の向上に取り組んでいます。物やお金を与えるのではなく、村人が自分たちの力で母と子の健康を支えることができるように、そして保健行政・病院はより良い保健医療サービスが提供できるように支援を展開しています。例えば、「村落栄養ボランティア（VNV: Village Nutrition Volunteer）育成事業」は、食事・栄養の問題解決を村人の力でできるように、正しい知識・技術をもったボランティアを育成し、その活動を支援する取り組みです。また、「郡病院母子保健サービス向上支援」は、病院の5S（整理・整頓・清掃・清潔・しつけ）活動を通して、病院内で起こるミスを減らし、効率化し、患者さんが気持ちよくサービスを受けるための取り組みです。実は、このどちらの取り組みも、日本で今も実際に行われている活動だと、みなさんはご存じですか？

ISAPHではラオス人を日本に招聘して、日本の保健医療サービスに触れることで、ラオスの保健医療の向上に還元することを目的とした本邦研修を実施しています。今年はAINプログラムのご支援により3名のラオス人を招き、市町村の保健サービス、私立病院の病院管理について研修を実施しました。まず市町村の保健サービスについては、福岡県小郡市総合保健福祉センター「あすてらす」で、小郡市の保健師・栄養士といった専門職の方から事業の説明をしていただき、食生活改善推進員（通称:ヘルスメイト）のボランティア活動を見学しました。ラオス人たちは「ボランティアが自分たちで住民へ健康教育をしているのか」と、40年以上も歴史がある食生活改善推進員の活動に驚きを隠せない様子でした。しかし、それらの活動が行政による支援を受けていることを知り、住民と行政と一緒に健康づくりをしているという日本の形を学ぶことができたようでした。さらに、今年も名古屋公衆医学研究所にご協力いただき、愛知県豊橋市で特定健康

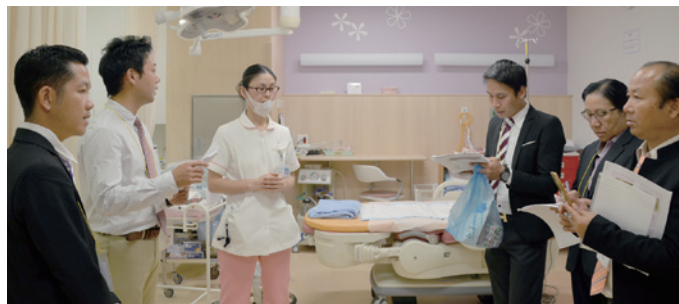


保健指導における工夫を学ぶ研修員たち

診査を見学しました。そこでは保健師より、住民の行動変容を促すために、どのように保健指導を工夫しているかなどのお話を伺いました。



小郡市総合保健福祉センターの皆さまと一緒に



分娩室の見学

福岡県久留米市の聖マリア病院では、医療の質管理本部の取り組みの一つである「5S推進会」を見学し、医療機器や治療に必要な物品を正しく整えることが、どのように患者の命を助け、医療サービスの向上に繋がるか、ラオスの現状と照らし合わせながら解説していただきました。さらに、昨年に続いて聖マリア学院大学において「ラオスの文化と保健医療」というテーマで講義を行う機会をいただき、ラオスがどのような保健課題に取り組んでいるか学生たちに紹介することができました。

今回の研修で強調したことは、ラオスの保健医療は日本と比べて遅れているとか、サービスが悪いということを知りてきたのではなく、住民の健康を守り、患者へのサービスを向上させるには今どんなことができるか、そのアイデアを学んでほしいということでした。日本では、ラオスのように少数民族が多く、言葉が違ふことで、保健医療サービスの提供が難しい状況に置かれたことはありません。他にも、国の特色からお互いに経験したことがない問題がたくさんあります。ですから、保健医療に携わる専門職として、日本では健康づくりや保健医療サービスに関してどのような努力や工夫をしているのか、研修員がラオスに持ち返ることができるよう心掛けました。

ISAPHのラオスでの活動はまだまだ続きますが、今回の研修で様々な刺激を受けた3名を中心に、さらに活動が深く展開していけるようラオスの人々と共に取り組んで参ります。最後になりましたが、改めまして、この度の研修にご協力いただいた聖マリア病院、聖マリア学院大学、福岡県小郡市総合保健福祉センター、愛知県豊橋市保健センター、名古屋公衆医学研究所の皆様、心からお礼を申し上げます。

食料生産を通じて マラウイの母子の栄養改善を

ISAPHマラウイ 山本 作真

事務所長としてマラウイ事務所に着任しました、山本作真と申します。マラウイには10年前まで青年海外協力隊で派遣され、青少年更生施設で子どもたちに野菜栽培の指導を行っていました。10年ぶりのアフリカの暮らしは、率直に言って違和感がなく、我ながら驚いています。

この10年間でマラウイにも変化が見られ、ゆっくりとではありますが確実に発展していることを実感します。目立つところではスマートフォンの普及や、電気の来ていない村で住宅にソーラーパネルが設置されているのを見かけるようになり、テクノロジーの浸透には驚嘆するばかりです。他にも、若い女性が自転車に乗るようになったり、私たち外国人に対する物腰が柔らかくなったりと、以前も長期滞在していた分、人々の生活の細かい差異が目いきます。

今回の活動は母子の栄養改善ということで、ISAPHは以前からマラウイで5歳未満の身体測定や

予防接種を行ってきましたが、同時に食料の面からも改善を図るため、農業担当の私が赴任することになりました。マラウイの主食はトウモロコシの粉を練ったものですが、実際にこちらで食事をしていると主食の量がとにかく多く、代わりに肉や野菜は量も種類も乏しく、これでは栄養が偏るだろうなと実感します。ISAPHとしては初めての農業分野の人間ということで、保健分野のアプローチと協力して相乗効果を発揮できたらと思います。



保健ワーカー活動拠点の完成式典にて

マラウイの子どもたちが 健康的に成長できるように

ISAPHマラウイ 池邊 佳織

はじめまして。1月よりISAPHマラウイ事務所に着任しました池邊佳織と申します。マラウイへは以前、青年海外協力隊にて派遣され、5歳未満児の健診や小学校での保健授業などを行っていました。今回の赴任にあたり7カ月ぶりに訪れたマラウイは、変わらない雄大な景色と人々の笑顔や現地語でのあいさつに癒されると同時に、でこぼこなオフロードに揺られる感覚から帰ってきたんだなあと実感しています。

マラウイでは、マラリアや感染症などで子どもたちが亡くなるケースがあります。この原因の一つに低栄養があると考えています。そして、マラウイの約半数の乳幼児が低栄養であると言われています。しかし、食べ物が極端に少ないという状況ではありません。このため、少し工夫を加え意識を変えるだけで丈夫な体がつくれ、健康的な生活が送れると考えています。

現在ISAPHマラウイでは、前回のプロジェクト地域での活動をフォローしながら、新しい地域で母子栄

養改善プロジェクトを始める準備を進めています。今回のプロジェクトを通し、住民たちが自分たちでできる工夫の仕方を伝え、少しでも彼らの意識や行動を変える手助けができれば幸いです。そして、たくさんの子どもたちが元気に成長し、多くの学びや経験を通して豊かな人生を送ってほしいと願っています。これから本格的にプロジェクトが始動していきますが、現地の人々やISAPHと一緒に活動している現地職員と協力し、楽しみながら邁進していきたいと思っています。



以前一緒に活動していたプロジェクト地域担当の保健ワーカーとの再会

最近のできごと

2017年10月～2018年1月

- 10月16日～19日** 【ラオス】
村のリボリングファンド支援：
ドイツ国際協力公社（GIZ）の
マイクロファイナンス事業地を訪問
- 10月24日・25日** 【ラオス】
第11回ラオス保健研究フォーラムに参加
- 11月25日** グローバルヘルス合同大会2017（東京）に参加
- 11月28日・29日** 【ラオス】 MOU 半期活動報告会を開催
- 11月30日～1月9日** 【マラウイ】 ISAPH事務局の村井をマラウイに派遣
- 12月5日～9日** 【ラオス】
村のリボリングファンド支援：
GIZによる第1回財務管理能力強化研修を実施
- 12月5日～30日** 【ラオス】 AIN プログラム：
食用昆虫科学研究会理事長の佐伯真二郎氏を
ラオスに派遣
- 12月7日** 【マラウイ】 山本作真が事務所長として着任
- 12月9日～17日** 【ラオス】
AIN プログラム：
ISAPH事務局の磯をラオスに派遣
- 12月11日～14日** 【ラオス】
AIN プログラム：第1回 VNV 育成研修を実施
- 12月13日** 【マラウイ】
カウンディ・ヘルスポストにおいて、ONE by
ONE様のご支援により現地保健ワーカーのため
の活動拠点兼住居が完成、開所式を実施
- 12月26日** 【ラオス】
3カ月定期活動会議を開催
AIN プログラム：第2回栄養事業委員会会議を開催
- 1月5日** 【マラウイ】
池邊佳織がプロジェクト調整員として着任
- 1月9日～11日** 【ラオス】
村のリボリングファンド支援：
ISAPHによる第2回財務管理能力強化研修を実施
- 1月15日～23日** 【ラオス】 AIN プログラム：本邦研修を実施
- 1月26日** 【ラオス】 AIN プログラム：
第1回 VNV フォローアップ研修を実施



入会と寄付の
お願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員 年会費：30,000円

一般会員 年会費：3,000円

【振込先】

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人 ISAPH
口座番号 00180-6-279925

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、
ISAPH事務局までご連絡いただければ幸いです。

——— 特定非営利活動法人 ISAPH ———

【福岡事務所】

〒813-0034

福岡県福岡市東区多の津4-5-13 スギヤマビル4階
TEL.092-621-8611

【東京事務所】

〒105-0004

東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階
TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165

E-mail jimukyoku@isaph.jp

URL <http://isaph.jp/>

ISAPHの役員名簿

役 職	氏 名	備 考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学 名誉教授
理 事	深見 保正	元福岡県企業管理者
理 事	浦部 大策	聖マリア病院国際事業部 部長
理 事	江藤 秀顕	神山復生病院 医師
理 事	渡部 和男	龍谷大学法学部 客員教授
理 事	杉下 智彦	東京女子医科大学国際環境・熱帯医学講座 教授
監 事	竹之下 義弘	東京六本木法律特許事務所 弁護士

【ISAPH ニュースレター 第29号 編集スタッフ】

石原 潤子／磯 東一郎／乳井 昌史

社会医療法人
雪の聖母会



聖マリア病院

理事長：井手 義雄 病院長：島 弘志

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115
URL <http://www.st-mary-med.or.jp>

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- 地域医療支援病院
- 福岡県救命救急センター
- 福岡県総合周産期母子医療センター
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 福岡県肝疾患専門医療機関
- 福岡県災害派遣医療チーム指定医療機関
- 福岡県第二種感染症指定医療機関
- 地域がん診療連携拠点病院
- 福岡県小児救急医療電話相談施設
- 福岡県児童虐待防止拠点病院
- 久留米広域小児救急医療支援施設
- A Baby-Friendly-Hospital-Initiative (赤ちゃんにやさしい病院) WHO・ユニセフ指定
- 自動車事故対策機構NASVA療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 日本医療機能評価機構認定施設（一般病院Ver.6.0）
- 日韓医療技術協力指定病院
- 久留米市病（後）児保育施設

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。